

古フランス語に見られる共時的「ゆれ」と通時的变化について*

Oscillation linguistique synchronique relevée en ancien français
et son changement diachronique

今田良信

IMADA Yoshinobu

0. はじめに

筆者はこれまで、フランス語における言語の体系と変化について、また古フランス語から現代フランス語に亘って見られる言語構造の変換¹⁾について考察してきた。

人間の言語は、部分的に絶え間なく変化しているはずであるが、その只中に身を置いている我々がその変化をリアルタイムで感じ取ることはなかなか難しく、変化の跡もある程度長い時間の経過の後でしか気づくことが難しいものである。しかし、言語の体系の中には言語変化が起こっている証拠として共時的に垣間見ることができる「手掛けり」がある。それが共時的「ゆれ」の存在である。

そこで今回は、この共時的「ゆれ」の現象が、古フランス語においては言語体系内部のどの部分に見られるのか、そして、それが現代フランス語ではどのように変化したのかを、これまで拙論の中で観察されたオリジナルな事例を中心に記述することを目的とする。扱う「ゆれ」の内容や観察された事例数が異なるので、すべての事例を統一的に扱うことはできないが、可能なものは変化の跡を数量的に示すこととする。

古フランス語に見られる共時的「ゆれ」は、言語分析レベルから分けると、(a)綴字上の「ゆれ」、(b)様々な文法範疇上の「ゆれ」、(c)統語（語順）上の「ゆれ」、(d)同一形式の意味上の「ゆれ」などが予想されるが、今回扱うものは、ほぼ(b), (c)に限られる。

具体的には、①名詞の文法性の「ゆれ」、②同一の統語環境において身体部位名詞に先立つ所有形容詞と定冠詞の使用の「ゆれ」、③同一と考えられる統語環境において用いられる前置詞の使用の「ゆれ」、④現代語訳では意味上のニュアンスなどの違いが認められない、文頭の同一の状況補語（C_c）に後続する主語（S）と動詞（V）の語順の「ゆれ」、⑤現代語訳では意味上のニュアンスなどの違いが認められない、同一の付加形容詞（A）と名詞（N）の語順の「ゆれ」について、各事例を1～2例ずつ示し、その変化について考察を加える形を取る。なお、今回挙げる具体的事例はいずれも、筆者がこれまで古フランス語の諸問題について扱ってきたオリジナルな論考における資料体を中心として観察されたものである。

1. 具体的事例と考察

1. 1. ①名詞の文法性の「ゆれ」

文法性の「ゆれ」とは、(1)に見られるように、同じ名詞 *codre*²⁾ が338 行目では定冠詞 *le* でマークされ男性名詞扱いであるのに対し、339 行目では *la* でマークされ女性名詞扱いとなっており、同一名詞の文法性が両者の間で「ゆれ」ている現象を指す。現代フランス語では、-ierという派生接辞が付いて語形も変わり、文法性は男性に一本化されている。

(1) *Pur le freisne que vus larrez*

En eschange le codre avrez;

En la codre ad noiz e deduiz,

Li freisnes ne porte unke fruiz! (Fre.³⁾ 337-340)

「汝はとねりこを見捨て／その代わりにはしばみ(*le coudrier*)を手に入れるでしょう。／はしばみ(*le coudrier*)には実も楽しみもありますが、／とねりこは決して実を付けません。」〔拙訳。()内は現代フランス語訳。以下同様〕

今田(1987)のデータによれば、限られた範囲のものではあるが、古フランス語で文法性に「ゆれ」があると認められた名詞 123例(100%) のうち、現代フランス語においては、名詞そのものが消失したものが19例(15%)、男性名詞となったものが62例(50%)、女性名詞となったものが34例(28%)、何らかの形で「ゆれ」を維持しているものが 8例(7%) であった。詳しくは、拙論を見られたい。

1. 2. ②同一の統語環境において身体部位名詞に先立つ所有形容詞と定冠詞の使用の「ゆれ」

次に、(2a), (2b)は、ほぼ同様の状況を描写した文であるが、身体部位名詞に先立つ限定詞が、(2a)では定冠詞、(2b)では所有形容詞となっている。現代語訳では、(2a), (2b)ともに定冠詞が用いられており、この事例の構文の場合、現代語では定冠詞に収束したことになる。

(2a) *si l'anclina et les mains joint* (Per.6145)

「彼〔ペルスヴァル〕は彼〔隠者〕に頭を下げ、手(*les mains*)を合せた。」〔拙訳〕

(2b) *si li ancline et ses mains joint* (Per.8451)

「彼〔グリノマラン〕は彼〔ゴーヴアン〕に頭を下げ、手(*les mains*)を合せた。」
〔拙訳〕

朝倉(1984), p.165 によれば、現代フランス語について、「§2 1対をなす体の部分、(2)その両方に対して動作を行う場合は複数定冠詞」⁴⁾ とある。しかし、Hatcher(1944),

Guéron(1983), Julien(1983), 大久保(1985), 小石(1986)などによれば、その他の構文の場合については、所有形容詞と定冠詞の用法は一筋縄では行かないようである。古フランス語でもこの両者の用法の複雑さは同様であるが、古フランス語のこの問題については、今田(1991), (1992), および前田(1984)を参照されたい。

1. 3. ③同一と考えられる統語環境において用いられる前置詞の使用の「ゆれ」

(3a), (3b)には、いずれも同様の文脈で、「～によって、で」という手段を表す意味の前置詞が用いられているが、(3a)ではdeが、(3b)ではparが用いられている。現代語訳では、(3a), (3b)ともにdeが用いられ、現代語ではdeに収斂したと見られる。

(3a) — Or vos demant ge, fet li rois, quanz chevaliers vos cuidiez avoir ocis
de vostre mein en ceste queste. (M.A.3/10-12)

「「さて汝〔ゴーヴァン〕に尋ねるが、今回の探索の間に汝は汝の手で(de)何人の騎士を殺めたと思うか」と〔アーサー〕王は言った。」〔拙訳〕

(3b) Je vos di por voir que g'en ai ocis par ma main dis et uit … (M.A.3/18-20)

「私〔ゴーヴァン〕は、私の手で(de)18人の騎士を死なせたのは真実だと申し上げます。」〔拙訳〕

現時点では筆者の知る限り、このdeとparのペアによる「ゆれ」の出現事例は、hapax⁵⁾状態ではあるが、これほど近接した脈絡において同一の統語環境で異なる前置詞が出現している点は興味深く見過ごしにはできない。今後も観察が必要な事例と言えよう。

1. 4. ④現代語訳では意味上のニュアンスなどの違いが認められない、文頭の同一の状況補語 (C_c) に後続する主語 (S) と動詞 (V) の語順の「ゆれ」

これは、筆者が一連の拙論⁶⁾において長年に亘り取り組んできた問題に関わる現象である。古フランス語では、Cが文頭に立つ場合には、原則としてCVS語順が取られることになっている。⁷⁾しかし、実際にテキストを見てみると、13世紀前半の散文作品では既にCが文頭に来る場合でもCSV語順の事例が散見される。次に挙げる事例は、同一のC_cが文頭に来た場合、後続するSとVの語順に「ゆれ」が見られる事例である。(4a), (4b)は、文頭に立つC_cが語の位階⁸⁾の状況補語 (C[MOT]_c)の場合、(5a), (5b)は、C_cが節の位階の状況補語 (C[PROP]_c) の（従って、文全体としては複文になる）場合である。

先ず、C_cが語の位階の状況補語について、(4a), (4b)は、いずれも同一の状況補語であるmeintenant⁹⁾が文頭に立っているが、(4a)は後続がVS語順を取り、(4b)はSV語順を取っている。

(4a) *Maintenant se part Lancelos de leanz entre lui et son compaignon et …*

C[MOT]c — V — S

(M.A.16/63-64)

「すぐに(aussitôt)ランスローは仲間の者と共にそこ〔宿舎〕を離れた。」〔拙訳〕

(4b) *Maintenant li conte et li baron parlerent ensemble, et cil qui a la lor*

C[MOT]c ——— S ——— V

partie se tenoient, et … (C.C.84/1-2)

「すぐに(aussitôt)諸侯や彼らに従う者たちは一緒に話し始めた。」〔拙訳〕

しかし、現代語訳を見ると、(4'a), (4'b)のように、いずれもSV語順を取っており、

しかも後続の語順の違いによる意味上のニュアンスの違いは認められない。

(4'a) "Aussitôt Lancelot quitte le logis avec son compagnon et …"

C[MOT]c S V

(4'b) "Aussitôt les comtes et les barons, et ceux qui se tenaient à leur parti,

C[MOT]c ————— S —————

parlèrent ensemble et …"

V

また、C_cが節の位階の状況補語については、(5a), (5b)は、いずれも同一の状況補語節（厳密には、同一の従属接続詞句）である *endementres que* (+節) が文頭に立っているが、(5a)は後続がVS語順を取り、(5b)はSV語順を取っている。

(5a) *Endementres que ce fu avenu, vint uns messages del roiaume de Logres*

———— C[PROP]c ————— V ————— S —————

a Lancelot, … (M.A.196/1-2)

「このような事が起こっている間に、ローグル王国からの使者がランスローの下にやって来た。」〔拙訳〕

(5b) *Endementres qu' il parloient de ceste chose, messire Gauvains regarde encoste*

———— C[PROP]c ————— —— S ————— V

la damoisele et … (M.A.71/1-3)

「彼ら（アーサー王とゴーヴァン殿）がその事について話し合っている間に、ゴーヴァン殿は傍らにいるその娘を見た。」〔拙訳〕

一方、現代語訳を見ると、(5'a), (5'b)のように、いずれもSV語順を取っており、しかも、この場合も、後続の語順の違いによる意味上のニュアンスの違いは認められない。

(5'a) "Pendant que se déroulaient ces faits, un messager de Logres vint trouver

C[PROP]c ————— S ————— V

Lancelot, … "

(5'b) "Pendant qu'ils s'entretenaient de ce sujet, messire Gauvain regarde à côté

C[PROP]c ————— S ————— V

de la jeune fille et … "

従って、現代フランス語においては、「動詞第2位」と呼ばれている古フランス語の語順体系（SVC・CVS）から筆者が「SV定置化」と呼んでいる現代フランス語の語順体系（SVC・CSV）への語順構造の変換に伴い、平叙文においてSV語順への一本化（収斂）（すなわち、古フランス語：~~SVC~~・CVS > 現代フランス語：~~SVC~~・~~CSV~~）が行われたということになろう〔※SVへの網掛けはSV・VSからSVへの一本化（収斂）を表す〕。¹⁰⁾

1. 5. ⑤現代語訳では意味上のニュアンスなどの違いが認められない、同一の付加形容詞（A）と名詞（N）の語順の「ゆれ」

(6a), (6b)では、いずれも同一の付加形容詞(extraordinaire)が名詞(aventure)を修飾しているが、(6a)はAN語順、(6b)はNA語順となっている。現代語訳を見る限り、いずれもAN語順の同一の言い回し(une extraordinaire aventure)で訳されており、古フランス語の語順の「ゆれ」による意味上のニュアンスの差は訳語に表現されていない。

(6a) Et quant il voient ces lettres, si dient li uns a l'autre: «Par foi, ci a
merveilleuse aventure!» (Q.G.4/11-12)

A N

「彼等（ランスロー、ボオール、リオネル）は刻まれた文字を見て、互いに言い合った『誓って、これは驚くべき出来事(une extraordinaire aventure)だ！』」

(6b) «Venez le veoir, qar je sai bien que ce est aventure merveilleuse.»

(Q.G.5/15-16)

N A

「『あれを見に行ってご覧なさい。と言うのも、私はそれが驚くべき出来事(une extraordinaire aventure)だとよく分かっているのですから。』」

現時点では古フランス語のこの語順の「ゆれ」に意味的あるいは何らかの機能的差異が無かったとまでは断言できない。しかし、Moignet(1979²)、P.345以下、等に述べられているように、名詞に対する付加形容詞の位置による意味的な機能分担¹¹⁾だけによって説明することにも無理があると筆者は考える。なお、古フランス語における付加形容詞と名

詞の語順については今田(2014), (2015), (2016)を参照されたい。

2.まとめと今後の課題

以上、今回まだ問題提起の域を出ないが、古フランス語における共時的「ゆれ」の現象の存在と現代フランス語におけるその変化の跡ができるだけ分かりやすい具体的な事例で説明した。しかし、「ゆれ」の内容により出現事例の広がりが異なり、扱うことができる事例数にも大きな差がある。本稿で挙げた古フランス語の個別事例の変化の跡については分かっていても、その事例と同じ内容の「ゆれ」のグループ全体の実態ならびに現代フランス語における通時的な収束の方向性の全体像については、まだ明らかにできないことも多く、そもそも事例数がまだまだ足りない。古フランス語には、当然ながらインフォーマントは居らず、欲しいと思う事例が思うように集まらない憾みは有りはするが、今後も観察を続ける必要がある。

注

- * 本稿は、日本ロマンス語学会第56回大会（京都大学吉田南キャンパス、2018年5月13日（日））における口頭発表をもとに加筆・修正を施したものである。
- 1) 今田(2012b), p. 21 参照のこと。
- 2) 引用例中ではイタリック体にしてある。本稿では、「ゆれ」ているポイントの箇所については、以下も同様にイタリック体で示すこととする。
- 3) 引用資料を参照のこと。
- 4) 事例として, *croiser les bras (les jambes)* 「腕（脚）を組む」, *hausser les épaules* 「肩をそびやかす」, *dresser les oreilles* 「耳をそばだてる」, *fermer (ouvrir, écarquiller) les yeux* 「目を閉じる（開く, みはる）」等が挙がっている。
- 5) 『新スタンダード仏和辞典』（1992, 第4版）によれば、「〔ギ〕ハパックス、単独用例語（語句）〔特定の時代の文献資料中に、ただ一度しか使用例の記録されていない単語または句〕」のこと。
- 6) 今田(1993), (1995), (1996), Imada(1997), 今田(1998), (2001), (2002a), (2002b), (2002c); 今田(2009), (2010a), (2010b), (2012a), (2012b), (2013a), (2013b), (2017)を参照のこと。
- 7) この語順は古フランス語の基本語順とされるS V Cと共に、いずれも文の第2位にVが来ることから「動詞第2位」文と呼ばれ、古フランス語の原則とされるものである。
- 8) 元々、M. A. K. Halliday の用語で、大きさという尺度により配列され、階層をなす

- 文法諸単位間の関係を言うが、本稿では、田中編(1988), p. 547 の記述、等を踏まえ、筆者独自に、大きい方から節[PROP] > 句[SYN] > 語[MOT]という階層をなす状況補語(C. : Complément circonstanciel)を区別する。詳しくは、今田(2002c)を参照のこと。
- 9) (4b)ではmaintenantとなっており、これは0. で挙げた(a)綴字上の「ゆれ」の事例の1つであるが、本稿ではこの「ゆれ」は問題としない。
 - 10) 詳しくは、今田(2013b), pp. 83-84を参照のこと。なお、本稿で挙げた(4a), (4b)および(5a), (5b)以外の事例については、今田(2002c)の巻末の「付録：資料体」を参照されたい。
 - 11) これによれば、例えば、前置と後置という位置の違いそのものに「一般化」（形容詞grant「大きい」であれば、「他のものと同じく大きい」と「特殊化」（「他のものと違って大きい」とでもいうべき機能分担があり、それによって形容詞の位置が選ばれていることになるが、当然ながらこれのみでは説明は不可能である。

引用資料

- M.A.: *La Mort le roi Artu*, édité par Jean Frappier(1964), TLF 58, Genève: Droz/ Paris: Minard. [*La Mort le roi Artu* traduit en français moderne par Monique Santucci, TCFMA 47, Paris: Honoré Champion.]
- C.C.: Villehardouin: *La Conquête de Constantinople*, éditée et traduite par Edmond Faral(1973), Paris: Les Belles Lettres.
- Fre.: Fresne dans *Les Lais de Marie de France*, publiés par Jean Rychner(1983), CFMA 93, Paris: Honoré Champion. [*Les Lais de Marie de France*, traduit en français moderne par Pierre Jonin, TCFMA 13, Paris: Honoré Champion.]
- Per.: Chrétien de Troyes: *Le Conte du Graal (Perceval)*, publié par Félix Lecoy (1984), CFMA 103, Paris: Honoré Champion. [Chrétien de Troyes: *Le Conte du Graal (Perceval)*, traduit en français moderne par Jacques Ribard, TCFMA 29, Paris: Honoré Champion.]
- Q.G.: *La Queste del saint Graal*, édité par Albert Pauphilet(1980), CFMA 33, Paris: Honoré Champion. [*La Quête du saint-Graal*, traduite en français moderne par Emmanuèle Baumgartner, TCFMA 30, Paris: Honoré Champion.]

参考文献

- 朝倉季雄(1974): 『フランス文法覚え書』, 白水社

- 朝倉季雄(1984)：『フランス文法メモ — 基本語の用法 —』，白水社
- 今田良信(1987)：「ラテン語から現代フランス語に至る名詞の文法性の変化についての研究 — 古フランス語に於いて性にゆれのある名詞を対象として —」，『広島大学文学部紀要』，46, pp. 362-385.
- 今田良信(1991)：「古フランス語における身体部位名詞に先立つ所有形容詞と定冠詞の用法について」，『ロマンス語研究』，24, pp. 35-46.
- 今田良信(1992)：「古フランス語における身体部位名詞に先立つ所有形容詞と定冠詞の用法について(2) — 13世紀散文資料の分析を加えて —」，『広島大学文学部紀要』，51, pp. 428-443.
- 今田良信(1993)：「古フランス語における文頭の補語要素と語順 — CVS語順対CSV語順を基準として —」，『ニダバ』，22, pp. 80-92.
- 今田良信(1995)：「古フランス語における文頭に従属節を有する複文の語順について」，『吉川守先生御退官記念言語学論文集』，溪水社, pp. 31-45.
- 今田良信(1996)：「古フランス語における文頭の補語と語順」，『ロマンス語研究』，29, pp. 68-82.
- Imada, Yoshinobu(1997)：La distinction *affirmation/négation* dans la phrase et l'ordre des mots en ancien français — Sur le rapport entre certains compléments circonstanciels en tête de phrase et l'ordre CVS/CSV —，*Studia Romanica* 30, pp. 9-16.
- 今田良信(1998)：「古フランス語における文の肯定／否定と語順 — 文頭に現れる若干の状況補語（句）とCVS／CSV語順との関係について —」，『新村猛先生追悼論文集』，フランス図書, pp. 205-210.
- 今田良信(2001)：「古フランス語における語順解明のために — 13世紀散文作品 *La Mort le roi Artu* による資料体作成 —」，『広島大学大学院文学研究科論集』，61／特輯号 4, 72p.
- 今田良信(2002a)：「古フランス語における肯定／否定とCVS／CSV語順 — 文頭に立つ文の肯定／否定に関わる若干の状況補語（句）と統語環境 —」，『古浦敏生先生御退官記念言語学論集』，溪水社, pp. 75-89.
- 今田良信(2002b)：「古フランス語における語順変化の研究のために — 13世紀散文作品 *La Vie de saint Eustace* による資料体作成 —」，『ニダバ』，31, pp. 1-10.
- 今田良信(2002c)：『古フランス語における語順研究 — 13世紀散文を資料体とした言語の体系と変化 —』，溪水社, 409p.

- 今田良信(2009)：「フランス語歴史言語類型論の試み」，『ニダバ』，38, pp. 1-10.
- 今田良信(2010a)：「フランス語における言語構造の変換 — 歴史言語類型論の視点から —」，『ニダバ』，39, pp. 31-40.
- 今田良信(2010b)：「歴史言語類型論的視点から見たフランス語の疑問文」，『ロマンス語研究』，43, pp. 21-30.
- 今田良信(2012a)：「フランス語における語順構造シフトの通時的方向性 — 語順類型論的観点から見えてくるもの —」，『ニダバ』，41, pp. 117-126.
- 今田良信(2012b)：「古フランス語と現代フランス語の間に見られる言語構造の変換」，『ロマンス語研究』，45, pp. 21-30.
- 今田良信(2013a)：「フランス語語順構造シフトの過程における一般言語学的言語作用 —」，『ニダバ』，42, pp. 30-39.
- 今田良信(2013b)：「フランス語における語順構造シフトの通時的方向性 — 平叙文および疑問文のS／V語順構造の観点から見えてくるもの —」，『ロマンス語研究』，46, pp. 77-86
- 今田良信(2014)：「古フランス語における付加形容詞と名詞の語順に関する考察 — 文法書記述の問題点、矛盾点に着目して —」，『ニダバ』，43, pp. 21-30.
- 今田良信(2015)：「古フランス語における付加形容詞と名詞の語順について — 延べ用例総数と形容詞別異なり語数の対比による文法書記述の再検証 —」，『ロマンス語研究』，48, pp. 1-10
- 今田良信(2016)：「古フランス語における付加形容詞の位置と韻律上の特徴について」，『ロマンス語研究』，49, pp. 61-70
- 今田良信(2017)：「フランス語語順構造シフトの過程に見られる一般言語学的特徴 — 節内基本語順の各構成要素(S／V／O)間にはたらく言語作用について —」，『ロマンス語研究』，50, pp. 77-86
- 大久保伸子(1985)：「体の一部を表す名詞における所有形容詞と定冠詞」，『フランス語学研究』，19, pp. 97-107.
- 小石悟(1986)：『譲渡不可能』などを表す名詞の前の限定詞，『独協大学外国語教育研究』，5, pp. 1-41.
- 田中春美編(1988)：『現代言語学辞典』，成美堂
- 前田弘隆(1984)：所有形容詞に代わる定冠詞の用法について — フランス語を中心に —，『ニダバ』，13, pp. 63-64.
- Bonnard, H. & Régnier, C. (1989): *Petite Grammaire de l'ancien français*, Paris:

Magnard.

- Buridant, C. (2000): *Grammaire nouvelle de l'ancien français*, Paris: SEDES.
- Chaurand, J. (1987⁵): *Histoire de la langue française*, Paris: PUF.
- Frei, H. (1929): *La grammaire des fautes: Introduction à la linguistique fonctionnelle*, Paris: Geuthner. [小林英夫訳(1973)：『誤用の文法』，みすず書房]
- Guéron, J. (1983): L'emploi "possessif" de l'article défini en français, *Langue française*, 58, pp. 23-35.
- Hasenohr, G. (1993²): *Introduction à l'ancien français de Guy Raynaud de Lage*, Paris: SEDES.
- Hatcher, A. G. (1944): Il me prend le bras vs. Il prend mon bras, *Romanic Review*, 35, pp. 156-164.
- Jensen, F. (1990): *Old French and Comparative Gallo-Romance Syntax*, Tübingen: Max Niemeyer.
- Joly, G. (1998): *Précis d'ancien français*, Paris: Armand Colin.
- Julien, J. (1983): Sur une règle de blocage de l'article défini avec les noms de parties du corps, *Le français moderne*, 51/2, pp. 135-156.
- Marchello-Nizia, Ch. (1995): *L'évolution du français: Ordre des mots, démonstratifs, accent tonique*, Paris: Armand Colin
- Marchello-Nizia, Ch. (1999): *Le français en diachronie: douze siècles d'évolution*, Paris, OPHRYS.
- Ménard, Ph. (1976): *Manuel du français du moyen age: I. Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux: SOBODI.
- Ménard, Ph. (1988³): *Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux: Bière.
- Moignet, G. (1979²): *Grammaire de l'ancien français: Morphologie - Syntaxe*, Paris: Klincksieck.
- Perret, M. (1998): *Introduction à l'histoire de la langue française*, Paris: SEDES.
- Raynaud de Lage, G. (1975⁹): *Introduction à l'ancien français*, Paris: SEDES.
- Revol, T. (2000): *Introduction à l'ancien français*, Paris: Nathan.
- Wartburg, W. von (1971): *Evolution et structure de la langue française*, 2^e éd., Berne: Francke. [田島宏・高塚洋太郎・小方厚彦・矢島猷三訳『フランス語の進化と構造』白水社]